

法面緑化施工地における木本類の探索

福島県林業研究センター 森林環境部
平成15～18年度林業研究センター業務報告

1 部門名

林業－森林土木－治山・林道
分類コード 18-13-30000000

2 担当者

齋藤 寛・齋藤直彦

3 要旨

法面緑化に使用される植生は、早期緑化を図るため外来草本類に在来種を混入して施工されてきた。最近、法面の固定力にすぐれた木本類を導入する事例が増加してきたが、吹付用種子として入手容易な種類が使用される例が多い。現実の法面ではどのような木本類が成育しているのかを調査したので、今後の活用の参考に供する。

- (1) 県内の林道10路線の施工後1～20年までの114箇所の法面で出現した木本類92種のうち、主なものは、高木性ではアカマツ(優占度11.5%)、コナラ(1.3%)、中木性ではコウゾ(2.6%)、タラノキ(6.0%)、低木性ではモミジイチゴ(9.8%)、ヤマハギ(2.9%)、ヌルデ(25.1%)が優占度が高かった。

* 優占度:各調査地点3箇所ごとに被覆率を平均し合計した数を調査地点数で除したものを優占度とした。

- (2) アカマツ、ヌルデ、キイチゴ類は施工後間がない乾燥した厳しい環境でも成育する機会が多いため、先駆樹種として緑化への応用が可能と考えられる。ただし、アカマツは大きくなると根返りの、ヌルデはかぶれの危険もある。

4 その他の資料等

なし